

(西横浜国際総合病院 消化器科) 小松永二・石塚直樹・小松 壽

41. ポータブルイメージ装置による術中透視の有用性

(多摩南部地域病院 外科) 太田正穂・菊地友允・重松恭祐・  
鈴木隆文・桂川秀雄・高村光一

42. 初回手術より6年半経過後切除しえた腹腔内肉腫の1例

(筑波胃腸病院) 大橋正樹・田中 譲・小澤文明

III 生涯教育講座 司会 高崎 健

A 症例から学ぶ診療のポイント (その2)

1. 局所療法の限界と適応: 食道癌

コーディネーター 林 和彦

2. 局所療法の限界と適応: 大腸癌

コーディネーター 鈴木 衛

3. 急性腹症

コーディネーター 貞永嘉久・喜多村陽一

B ビデオ上映『食道癌治療の歴史』(第50回食道疾患研究会)

進行 山田明義

IV 指定講演

1. 胃癌リンパ節転移に対する外科治療の問題点

喜多村陽一

司会 高崎 健

2. 肝移植後の病態と病理学的特徴

橋本悦子

司会 林 直諒

3. 初期肝細胞癌の進展様式

斎藤明子

司会 林 直諒

4. 胃腸相関と消化管ホルモン

白鳥敬子

司会 林 直諒

5. 急性膵炎の診断と治療

渡辺伸一郎

司会 林 直諒

V 総括発言

名誉所長 中山恒明

閉会の辞

副所長 林 直諒

超音波内視鏡による胃筋原性腫瘍の診断

(消化器内科) 内田耕司

1992年から1996年までの5年間に、当センターにて、外科的手術がなされた胃筋原性腫瘍の18症例を対象とし、超音波内視鏡(EUS)およびColor Doppler-EUS(CD-EUS)による良悪性の鑑別について検討した。EUSでは、大きさ、辺縁、発育様式、内部エコーレベル、内部エコーの不均一性、無エコー領域の存在について、CD-EUSでは、血流数、最高血流速度について検討した。

結果は、EUSでは、大きさ、辺縁で有意差を認めしたが、その他では、有意差は認めず、良悪性の鑑別に困難な症例もあった。

CD-EUSでは、筋肉腫は、全例が4本以上の血流を有し、大部分が速い血流速度を呈し、高い正診率が得られた。近年、超音波内視鏡下穿刺生検にて容易に細胞診を得られるようになり、今後の更なる診断率の上

昇が期待できると考えられた。

慢性B型肝炎における各種HBV-DNA定量法の特性に関する検討

(消化器内科) 小島真二

近年、いくつかの血清HBV-DNAの定量法が、開発されているが、時として各検査法間で異なったデータを示すことが見受けられ、これらの検査法の臨床的有用性を検討するため、CH(B)40症例を対象に、感度と相関関係を検討した。

HBV-DNAの定量法としては、競合的PCR法(c-PCR法)、化学蛍光法(CL法)、分岐DNA法(b-DNA法)、更にHBV-DNAポリメラーゼと、採血時のALTで検討した。

各種HBV-DNA定量法の中では、b-DNA法が、c-PCR法に次いで鋭敏な定量法であった。しかしこれらは、e抗原陽性例ではトランスアミナーゼとの相関関係は弱かった( $p>0.05$ )。したがって、HBV-DNA定

量的評価には、患者の臨床経過に応じた適切な定量法の選択が必要であると考えられる。

### ドプラー超音波内視鏡による大腸腫瘍内血流観察の検討

(消化器内科)

田中美紀

〔目的〕直腸腫瘍25例(腺腫11, m 癌5, sm 癌3, カルチノイド4, 他2)においてドプラー超音波内視鏡を用い腫瘍内の血流を測定し, 悪性度診断の可能性を検討した。

〔装置〕アロカ社製ドプラー断層超音波装置に, オリパス社製7.5MHzの超音波内視鏡プローブを使用した。

〔結果〕観察血流数は1腫瘍あたり腺腫1.27本, 癌2.38本であった。血流速度静脈平均は腺腫3.15, 癌4.98, 動脈は腺腫9.73, 癌9.98cm/sであった。肝転移したカルチノイドの1例では, 静脈3本, 動脈1本を検出した。

〔結語〕①大腸小腫瘍25例中84%で血流観察が可能であった。腫瘍血管径100 $\mu$ m, 血流速度2.67cm/sより検出可能であった。②腺腫に比し, 癌で1腫瘍あたりの検出本数が多く, 静脈の血流速度が早い傾向があったが, 有意差はなく悪性度診断には至らなかった。③カルチノイドの血流と肝転移についての検討が今後の課題として考えられた。

### ヒト癌細胞特異的モノクローナル抗体を用いた抗腫瘍作用増強効果の検討

(消化器内科)

木村 知・林 直諒

〔目的〕当研究室で作製されたマウス抗ヒト癌細胞特異的モノクローナル抗体523 (KY3) の *in vitro* における抗腫瘍効果と, 認識する肝癌細胞表面の分子量を同定した。

〔方法〕①抗体依存性細胞障害活性の測定: *in vitro* で target cell は<sup>51</sup>Cr をラベルしたヒト肝癌細胞株 huH2, effector はヒト PBL を用い, 523抗体を添加して細胞障害活性を検討した。この細胞障害活性が抗体依存性細胞障害活性であるか否かを, effector である PBL の Fc receptor を block し細胞障害活性が抑制されるか否かで検討した。②523抗体により認識される細胞表面分子の同定: 523抗体により認識される huH2の cell lysate を作製し, Western blotting 法にて行った。

〔結果〕①523抗体添加群全例で PBL の細胞障害活性が増強し, Fc receptor を block すると抑制がみられた。また, この細胞障害活性の増強は523抗体が認識

する腫瘍細胞に対してのみ認められた。以上より523抗体は抗体依存性細胞障害活性を有すると考えられた。

②523抗体は分子量84kDa の分子を認識する。

〔考察〕523抗体は肝癌に対する新たな免疫療法を確立する上で有用な抗体と思われる。

### 潰瘍性大腸炎の癌化と遺伝子異常

(消化器内科)

戸田潤子

〔目的〕潰瘍性大腸炎(以下 UC)には癌を高率に合併し, 内視鏡的にも病理学的にも診断困難で遺伝子学的アプローチが必要である。UC 合併癌の分子病理学的特徴を明らかにし早期発見への有用性を検討する。

〔対象と方法〕UC 癌合併例12例と7年以上の経過の UC で癌非合併例5例を異型上皮分類し検討した。k-ras, DCC は DNA 抽出後 PCR-RFLP 法を, p53は一次抗体に p53ポリクローナル抗体を用い LSAB 法で検討した。

〔結果〕k-ras の変異率は低く, 変異 p53は癌合併群で悪性度に伴いびまん性陽性を示す割合が増加した。DCC コドン201は癌の有無に関わらず, グリシンが多かった。遺伝子学的な相違が通常の大腸癌との病理学的な違いに反映されると考えられ, また, 関与の大きい p53のサーベイランスコロノスコピーへの応用で早期診断に役立つと考えられた。

### 頸部食道胃管吻合後の残存食道炎の問題点

(消化器外科)

岡本史樹

〔目的〕食道再建術後の QOL に関し残存食道炎に注目し検討した。

〔対象と方法〕頸部食道胃管吻合後2年以上経過し定期的に観察できた54症例を対象とした。アンケートによる日常調査, 内視鏡観察および生検, pH モニターによる残存食道の pH 測定を行った。内視鏡で残存食道病変を食道炎, 食道潰瘍, Barrett 上皮を伴うものを Barrett 上皮化と分類し, 胃管組織像から正常, 萎縮性胃炎, 慢性胃炎, 体部腺の過形成と分類した。

〔結果〕アンケートの結果, 日常生活で逆流感など何らかの症状を自覚していることが多く, 症状を自覚する症例では食道炎がみられることが多かった。食道炎のない症例には生検で萎縮が多く, Barrett 上皮化例で過形成が多かった。pH モニターで食道炎のない症例は食道内の平均 pH が高い傾向にあり, 24時間の pH 4以下の割合も低かった。

### 肝細胞癌の造影所見と肝動脈塞栓術の治療効果に関する検討

(消化器外科)

畑中正行